JOS News Letter
2024年8月1日発行
Vol.14 No.2 2024
日本海洋学会ニュースレター　第14巻 第2号

寄稿
名誉会員に推薦されて ～私の学会活動の思い出～ 01
名誉会員に就任して ―空を通して陸と海をつなぐ― 02
グローバル南極学：大変化する氷床と地球環境の連鎖をつなぐ 05
ハビタブル日本：島嶼国日本の生存基盤をなす大気・海洋環境の持続可能性 06
情報
7th Zooplankton Production Symposium への参加報告 07
第 20 回 国際有害有毒藻類学会の運営を通じた若手人材の育成 08
対面での開催復活! 第 29 回・第 30 回「海のサイエンスカフェ」開催報告 11
JO 目次 12
海の研究の目次 13
沿岸海洋研究目次 13
カレンダー 14
学会記事
2024 年度 日本海洋学会春季大会 実施報告 15
2024 年度 日本海洋学会 春季会員集会 議事録 16
会計報告 19
連載
アカデミア　メランコリア(第 43 回) 22

寄稿 ①

名誉会員に推薦されて　～私の学会活動の思い出～

東北大学 名誉教授／海洋研究開発機構 特任上席研究員　花輪 公雄

この度の名誉会員へのご推薦、誠に有難うございます。大変光栄にそして嬉しく存じます。と同時に、名誉会員は 70 歳以上の会員が対象ですので、入会以来長い年月が経ってしまったことについて感慨を覚えました。

私は 1976(昭和 51)年 4 月に東北大学の大学院へ進学しましたが、その年度に本学会へ入会しました。学会事務局の情報を見ますと、正式に会員となったのは、幹事会の開催日だと思いますが、1977 年 1 月 11 日とありました。従いまして、今年は入会から 48 年目に当たります。院生時代は河口域を研究していましたので研究大会では沿岸のセッションで発表していました。その後教員となってからは研究対象を外洋域に広げ、いろんなテーマで研究しましたので、様々なセッションで発表させて頂きました。

私と学会‘運営’との関わりを述べておきます。初めて評議員に選出されたのは 1989/90 年度のことで、2019/20 年度まで務めさせていただきました。その間、1991 年度まで発行された学会誌 JOSJ の編集委員や、その後の JO の編集委員、そして JO の編集委員長(2003－06 年度)、副会長(2007－10 年度)、会長(2011－12 年度)、また沿岸海洋研究部会の委員や各賞の選考委員会委員と、いろいろ経験させて頂きました。

以下、いくつかの思い出を書くこととします。JO の編集委員長時代に、JO に初めてインパクトファクター(IF)が付きました。引用調査の対象誌となり丸 3 年を経て、Thomson Science 社は 2006 年 6 月 16 日に、2004 年の JO の IF は「1.669」であると発表しました。カテゴリ「Oceanography」に分類された全 41 誌中、第 10 位と高位でした。たかが IF、されど IF なのですが、編集委員長として安堵したことを思い出します。当時、私は嬉しい思いで海洋学会掲示板にこの旨を報告したようです(記事の URL を末尾に記す)。

副会長時代の思い出は、英文誌「JO」や和文誌「海の研究」の冊子体廃止の議論です。当時、世界中で電子ジャーナル化が急速に進んでいました。論文自体は電子化されますのでそれはいいのですが、印刷冊子で会員に提供することがどの程度の意義があるかという問題です。もちろん経費の問題も絡みます。これについては長く、多くの議論がありました。結果的に会員諸氏のご意見も踏まえ、2011 年度からは図書館等への配布を除き、会員には冊子を配布しないということになりました。その代わりニュースレター(NL)を冊子体で発行することを私は強く提案しました。会員内でコミュニケーションする場が必要であること、非会員との差別化・区別化が必要であること、などがその理由です。幸い賛同が得られましたので、2011 年度から当面の間は年 4 回、NL を発行することとしました。

上記のように、私が会長に就任する 2011 年度は、本学会にとって一つの区切りとなる年度でしたが、小池 勲夫会長からバトンタッチするまさにその狭間に、未曽有の大きな出来事が起こりました。2011 年 3 月 11 日㈮、午後 2 時 46 分、マグニチュード 9.0 の超巨大地震「東北地方太平洋沖地震」が発生したのです。私は仙台から東京に向かう新幹線の中でこの地震に遭い、仙台に戻れないまま 14 日㈪を迎え、会長になって初の幹事会に出席しました。そこで決めたのが、東京大学大気海洋研究所で予定されていた春季大会の中止です。私の会長職は、大会の中止の決断から始まりました。

この地震による「東日本大震災」に対しては、会員からの提言も受けて「震災対応ワーキンググループ(WG)」を立ち上げて対処しました。幹事会メンバーやボランティアの会員の皆さんと活動しましたが、今でも多くのことが思い出されます。震災対応 WG の活動は、本学会のウェブサイト「東日本大震災特設サイト」で知ることができます(末尾に URL)。その中に、後日、活動の妥当性を検証できるようにと、当時は公表しなかった WG の議事メモなども含めた「震災対応ワーキンググループ活動報告書」を作成しました(末尾に URL)。幸い本学会の震災対応は良かったとの意見(評価)を後にお聞きすることができましたが、当事者としてはもっともっとやれたのではという思いもあります。‘重い’思い出です。

最後に、学会活動においての一つの悔いを述べておきます。研究大会は日頃の研究の成果を披露し、様々な角度から批判や評価を受けますので大変緊張する場です。一方で、他機関の諸先生や研究仲間の方々と親しく交流できる場でもあります。懇親会では、私は増澤 譲太郎先生(1922－2000)や、宇野木 早苗先生(1924－2023)をはじめ、多くの先生方・諸先輩の方々に声をかけて頂きました。梶浦 欣二郎先生(1926－2004)や永田 豊先生(1934－2013)とはナイトセッション(お酒を伴った歓談の場)でよくご一緒させていただきました。シニアになった今、恩返しの意味でも私も特に若い皆さんにそうすべきなのですが、会長職から離れた 2013 年度以降は大学運営の方に活動の軸足が移り、学会への出席もほとんど叶わなくなっていましたので、まったくできておりません。

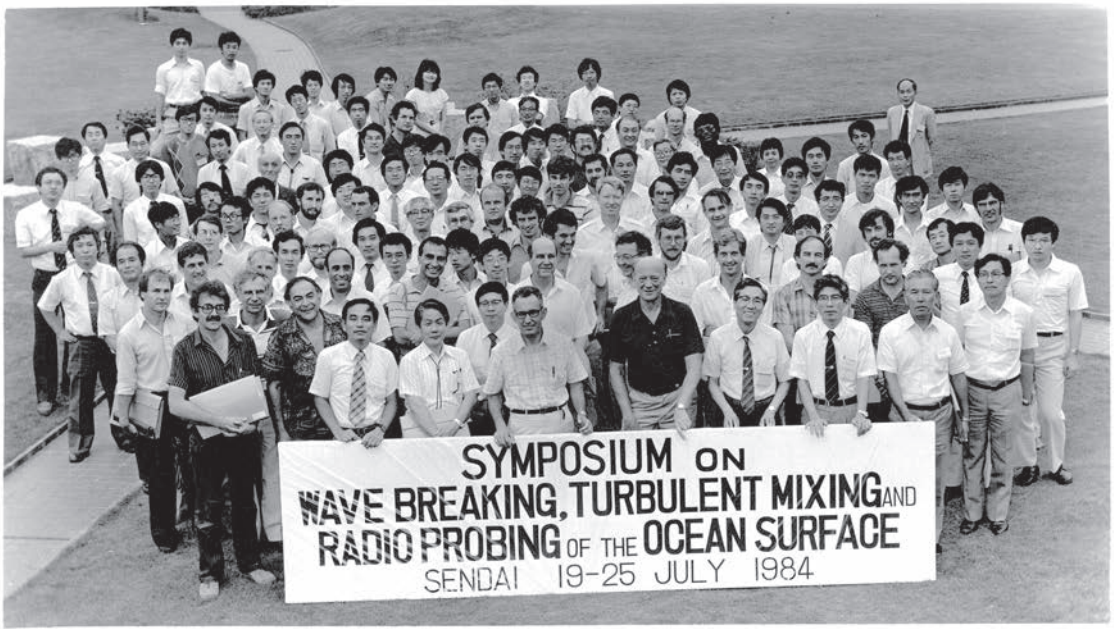
末尾に私にとって思い出深い、1984 年夏開催の国際シンポジウムの集合写真を示します。

【参考 URL】

1．JO 編集委員長として IF が付いたことを報告した記事
URL：https://kaiyo-gakkai.jp/jos/archives/publication/191

2．東日本大震災特設サイト
URL：https://kaiyo-gakkai.jp/jos/torikumi/geje2011

3．震災対応ワーキンググループ活動報告書
URL：https://kaiyo-gakkai.jp/jos/archives/geje2011_artcl/3279



1984 年 7 月に東北大学理学部で開催された略称「Ocean Surface Symposium」参加者の集合写真
前列中央の背の高い方が O.M. Phillips 博士、右に鳥羽 良明先生、光易 恒先生、岩田 憲幸先生、梶浦 欣二郎先生、Phillips 博士の左後ろは M.S. Longuet-Higgins 博士。シンポジウムには多くの海洋学会員も参加した。私にとって初めての本格的な国際シンポジウムで、大きな刺激を受けた。

寄稿 ②

名誉会員に就任して ―空を通して陸と海をつなぐ―

東京大学 名誉教授／埼玉県環境科学国際センター 総長　植松 光夫

1．はじめに

この度、1941 年に設立された歴史ある日本海洋学会の名誉会員に選んでいただき、大変光栄に思っています。

-There are two ways to live: you can live as if nothing is a miracle; you can live as if everything is a miracle- Albert Einstein

私にとって研究は楽しく、全てが奇跡の連続で生かされてきたような気がしています。多くの皆さんとの出会いの奇跡に感謝するとともに、今後もさらなる奇跡に出会えることを楽しみにしつつ、これまでを振り返ってみました。

2．北海道で学ぶ

海洋学会での最初の講演は、東京で開催された 1975 年度春季大会で、テーマは卒業研究の成果である「沿岸水の鉄について」でした(写真)。所属は北海道大学水産学部分析化学講座で、当時「鬼の角皆(つのがい)」と呼ばれた角皆 静男先生が、助教授として活躍されていました。すでに先生は、鉄の測定の困難さや生物への重要な役割を見抜かれて、私に与えて下さった研究課題でした。

学位論文がまとまりつつあった 1979 年には、米国の海洋化学分野で新しく学位を取る予定者と、取得直後の若手研究者が、マイアミ大学で開かれた第 1 回 Dissertations Symposium on Chemical Oceanography(DISCO)に招待されました。シンポジウム終了後、私は単身で米国東海岸を北上し、Postdoc としての職探しもかねて 4 カ所の研究室を訪問しました。

1975 年 4 月、東京共済会館にて同期生二人と共に(中央)

3．米国で暮らす

訪問先のひとつ、州立のロードアイランド大学では、Bob Duce 教授が中心となった大型研究計画、Sea-Air Exchange Program (SEAREX)が始まるところでした。私は Research Associate として採用され、1980 年、結婚したばかりの妻に、故郷の岸和田祭りを見せた翌日、9 月 16 日に二人で渡米しました。

着任後は、春先にアジア大陸で発生する黄砂が、偏西風によって北太平洋中央部へ運ばれ、深海堆積物の大部分を占めることを明らかにしました。それから 20 年後には、アジア大陸で舞い上がった黄砂が、2－3 週間で地球をぐるっと一周して太平洋に再度落ちることがわかりましたが、当時は夢にも思いませんでした。

4．北海道へ戻る

1987 年 11 月、米国で生まれた娘 2 人を含め、家族 4 人になって、米国東海岸から車で 2 週間かけて大陸横断し帰国。1988 年 4 月に発足する北海道東海大学工学部海洋開発工学科の助教授として着任しました。まもなく、当時ソ連のナホトカでの国際会議に招待され、それがきっかけとなり、ロシア太平洋海洋研究所と大気共同観測を行いました。教育に目覚めた頃でもあります。

5．東京に住む

1997 年 4 月には、東京大学海洋研究所の附属海洋科学国際共同研究センターに着任。翌年、1998－2003 年度戦略的基礎研究「海洋大気エアロゾル組成の変動と影響予測」(VMAP)が採択され、地球圏・生物圏国際協同研究計画(IGBP)のコアプロジェクトである地球大気化学国際協同研究計画(IGAC)や、海洋大気間物質相互作用研究計画(SOLAS)と深く関わり始めます。

2006－10 年度には、特定領域研究「海洋表層・大気下層の物質循環リンケージ」(W-PASS)に取り組みました。29 機関、89 名の研究者と協働し、船舶搭載用海洋大気観測システムを開発。それによって海洋大気組成と海洋生態系の時空間変動を捉える新しい境界領域研究分野が、認められるようになりました。

6．千葉に通う

2010 年 4 月に私の所属していた東京大学海洋研究所と、東京大学気候システム研究センターが統合され、東京大学柏キャンパスにおいて大気海洋研究所が発足しました。名称の通り、大気海洋科学の基礎研究が始まり、大気と海洋間の物質循環を志す研究者が育つようになりました。

2011 年 3 月 11 日、福島第一原子力発電所の事故発生後、直ちに柏キャンパスで大気エアロゾルの放射線測定を開始しました。海水の放射能測定は、日本海洋学会の震災対応ワーキンググループが担い、そのサンプリングと分析を誰がどこでやるのかのまとめ役を務めました。

海洋の放射能汚染は我が国だけの問題ではなく、近隣諸国はもちろんのこと、環太平洋の国々へ不安をもたらすものです。当時、16 代目の海洋学会長でしたので、学会として積極的に国際学会やシンポジウム、会議などで震災関連セッションを持ち、2013 年に冊子「Fukushima and the Ocean」を出版。研究者のみならず、世界中の幅広い層に、現状を知ってもらう努力をしました。

7．埼玉から世界を眺める

2019 年 4 月からは、海のない地方自治体の新しい職場、埼玉県環境科学国際センターに勤めています。多様な研究を通して、県の環境施策への情報提供や科学技術的な助言、環境学習を通して身近な環境への関心を高めるなど、ボトムアップで環境問題解決に取り組んでいます。Solution Oriented Research を通した実践活動であり、今までにない新たな経験になっています。

8．海洋学会に願いを込めて

日本海洋学会が主導し、諸外国の海洋学会との交流を深め、「One Planet, One Ocean」が世界中に広がることを、心より願っております。

2025年度助成・援助 募集のご案内

募集期間：2024年7月1日～10月31日

研究分野　自然科学、人文・社会科学、分野横断・融合領域における多様な研究を対象

助成対象者　我が国の**全ての大学**や**公的研究機関**に所属する常勤の研究者／研究グループ等

募集プログラム	分　野	助成期間	助成金額
研究助成			
一般研究助成	研究者交流援助に同じ	1年または2年	1件 300万円を上限
特定テーマ研究助成	財団が特定する研究テーマ	原則として2年	1件 2,000万円を上限
研究者交流援助			
研究者海外派遣	①都市・居住環境の向上 ②国土・資源の有効利用 ③防災・危機管理の推進 ④文化・自然環境の保全 ※ ①～④に関連する社会システム・情報技術等先端技術に関するものを含む	短期派遣 3か月以内	渡航費と滞在費 ・上級研究者　20,000円／日 ・中堅研究者　15,000円／日
		長期派遣 1年以内	渡航費と滞在費 ・中堅研究者　15,000円／日
外国人研究者招へい・受入れ		短期招へい 3か月以内	海外研究者の渡航費と滞在費 ・上級研究者　17,000円／日
		長期受入れ 1年以内	海外研究者の渡航費と滞在費 ・中堅研究者　10,000円／日 ・若手研究者　200,000円／月
国際学術交流援助			
国際研究集会	自然科学 及び 人文・社会科学分野全般	2025年度中の開催	1件 50万円
国際共同研究	研究者交流援助に同じ	1年または2年	1件 1,000万円を上限

詳細は財団ホームページをご覧ください
各助成のお申込み先はQRコードもリンクしています

鹿島学財　検索

公益財団法人
鹿島学術振興財団
THE KAJIMA FOUNDATION

〒107-8502　東京都港区赤坂6-5-30　鹿島KIビル
TEL. 03-3584-7418　https://www.kajima-f.or.jp/

寄稿 ③　学術変革領域研究 A

「グローバル南極学：大変化する氷床と地球環境の連鎖をつなぐ」

北海道大学 低温科学研究所　青木 茂

南極氷床は海水位約 60 メートル分の水を有する地表最大の淡水リザーバです。この南極氷床が今日急激に流出しつつあります。この氷床変化を引き起こすトリガーとなっているのは海洋の変化だと考えられます。逆に南極氷床の消長は、地球の海水位を変化させ、子午面循環にも影響を与えます。一方、南極の一部では降雪の増加により氷床量は増加しているとも考えられています。こうした気候要素の変化のなかには、互いに連鎖し、変化を不可逆的に加速させる可能性があることも指摘されています。南極域の氷床や海洋の変化は、ローカルな気候・環境要素間の関連性はもちろんのこと、大気も含めた地球規模の気候連関を考えなければ理解できないという問題意識から、私たちは学術変革領域「グローバル南極学：大変化する氷床と地球環境の連鎖をつなぐ」(2024－28 年度)を立ち上げました(https:// glaces.lowtem.hokudai.ac.jp)。本領域研究は、前身となる新学術領域「熱－水－物質の巨大リザーバ：全球環境変動を駆動する南大洋・南極氷床」(2017－21 年度)の取り組みを土台として、南極とグローバルな気候要素との関係性の理解へと発展させることを目標にしています。

「グローバル南極学」では A01－A03 のサブ領域を構成する 7 つの計画研究が走ります(図 1、2)。領域が対象とする現象の時間スケールが数日から数十万年と多岐にわたることから、まず時間を軸に観測時代から近未来への「短期スケール」(A01)と数十万年前から現代までをカバーする「長期スケール」(A03)とに分け、それぞれの中に主なフィールドとなる海洋と氷床(A01 には大気も)のグループを配しました。そして、既存の手法では到達できない氷の下へアクセスする新たな手段として自律型海中ロボット(AUV)プラットフォームの開発を行い(A02)、A01 と A03 へ知見を提供します。海洋学会のみならず、気象学会、雪氷学会、地球環境史学会、船舶海洋工学会などといった多様な研究分野をカバーする多分野融合的な組織となっています。

南極海・南極氷床を中心とする現場観測は、計画研究の中心的な部分を構成しています。南極地域観測とも連動して、しらせの航路上での海洋・大気観測や、氷河・氷床でのオペレーションを計画しています。特に第 66 次および第 67 次南極地域観測(それぞれ 2024 年 11 月－25 年 3 月と 2025 年 11 月－26 年 3 月)では、しらせによるトッテン氷河沖での集中的な現場観測が計画されています。このなかで、開発中の海中ロボット MONACA を、実際に氷海に投入することを計画しています。古気候分野の研究では、過去の観測で既に得られている海底堆積物・氷床コア試料に先端技術を用いて詳細に分析することで、南極域を中心としつつ北半球にも至る長期的な変動を記述し、相互の関連性を探ることを目指しています。得られた幅広い時・空間スケールにまたがる変動の時系列は、多圏・多階層の数値モデルによる解釈でつなぎ、全体の知見の統合に向かうことを目指します。計画研究では、前身となる新学術領域で育った若手研究者がいっそう活躍できる場を提供し、さらに若手研究者の参画を呼び込んでいくことを期待しています。

「グローバル南極学」では、第一期公募研究(2025－26 年度)を募集しています。南極底層水の形成・変動研究や高次生態系と物質循環研究といった計画研究班と直接的に連携する課題に加え、計画研究を補完または発展させる以下の B01－B03 の課題の実施を想定しています。B01 は、南極域と北極域との比較研究により、気候要素の相互作用プロセスの普遍性と独自性、両極間の相互影響を明らかにする研究です。B02 は、広大な南極氷床や南大洋の変動を捉えるための衛星リモートセンシング手法の開拓や、新たな数値モデルの参入(同位体モデル、生態系モデル、地球システムモデルなど)、新たな視点でのモデル改良・解析および理論研究が想定されます。さらに、B03 では新たな発想による手法開発・応用として、人力のみに依存しない現場観測手法やこれまでにない古環境指標などの開発による研究のブレークスルーに期待します。これまで南極環境の研究に携わってきた研究者はもちろん、境界分野・周辺分野の研究者や、初めて南極を対象にしようという研究者や若手研究者など、広範な研究者からの積極的な参加を得て、本領域全体を盛り上げていきたいと思います。多数のご参画やご理解をいただきますよう、是非ともよろしくお願いいたします。

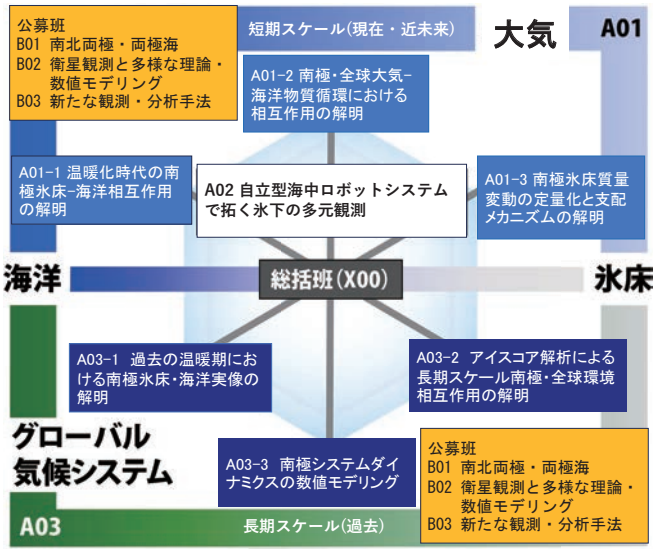


図 1　学術変革領域 A「グローバル南極学」組織図

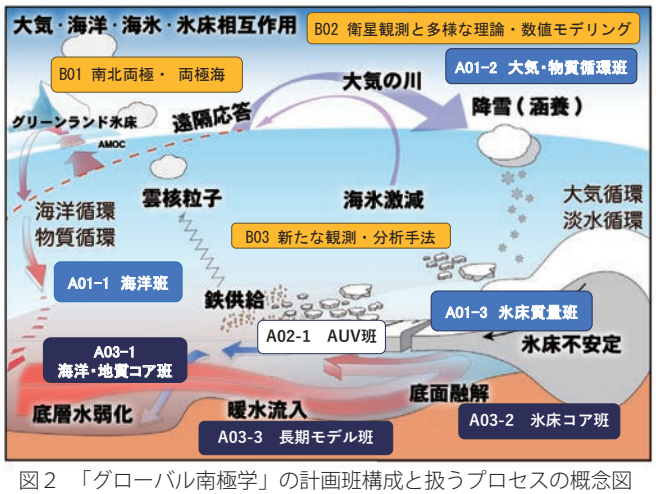


図 2　「グローバル南極学」の計画班構成と扱うプロセスの概念図

寄稿 ④　学術変革領域研究 A

「ハビタブル日本：島嶼国日本の生存基盤をなす大気・海洋環境の持続可能性」

東京大学 大気海洋研究所　岡 英太郎

日本周辺域は、冬季の海洋から大気への熱放出が世界最大である、代表的な西岸境界域であると同時に、日本と大陸の間に日本海が存在するという点が、他の西岸境界域とは大きく異なります。また、日本周辺域では、地球温暖化に伴い海面水温が全球平均の 2 倍の速度で上昇しており、台風・豪雨・豪雪等の気象災害の頻度も長期的に増しています。これまで、新学術領域研究「気候系の hot spot：熱帯と寒帯が近接するモンスーンアジアの大気海洋結合変動」(通称：Hotspot1。2010－14 年度)ならびに「変わりゆく気候系における中緯度大気海洋相互作用 hotspot」(通称：Hotspot2。2019－23 年度)では、日本周辺の中緯度海洋が大気に能動的に影響する「気候系の hotspot」であることを世界に先駆けて示し、ついで、温暖化のもとでの「気候系の hotspot」の役割を解明してきました。

さらに近年、黒潮の大蛇行、黒潮続流の異常北偏、親潮の北への後退、海洋熱波の頻発など、日本周辺の海流は過去とは異なる様相を見せ始めており、猛暑や豪雨などの気象現象のみならず、サンマやイカの漁獲減少、ブリの生息域拡大など、水産にも大きく影響しています(図 1)。以上の背景をもとに、学術変革領域研究「ハビタブル日本」(Hotspot3。2024－28 年度)では、研究対象を過去 2 回の新学術領域研究で取り組んだ中緯度の大気海洋相互作用から、大気・海洋の化学、海洋生態系、水産へと拡張し、「日本に住む我々の生存基盤をなしてきた温和な気候、豊かな水・水産資源は、今後

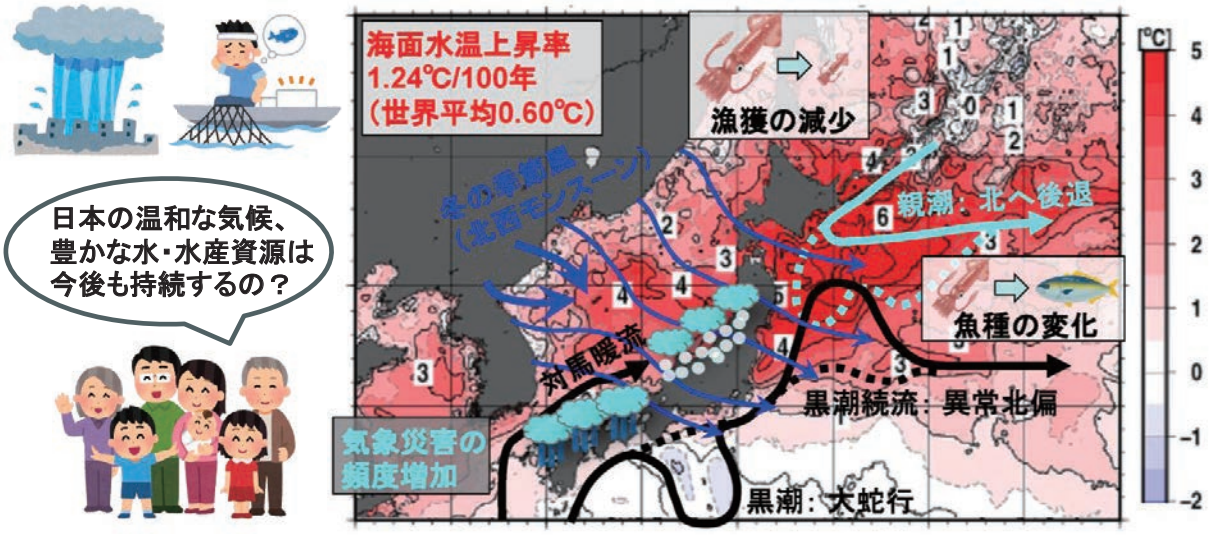


図 1　近年の日本周辺域の大気・海洋の変化。背景は 2023 年 8 月 23 日の海面水温の平年差(単位：℃　気象庁)

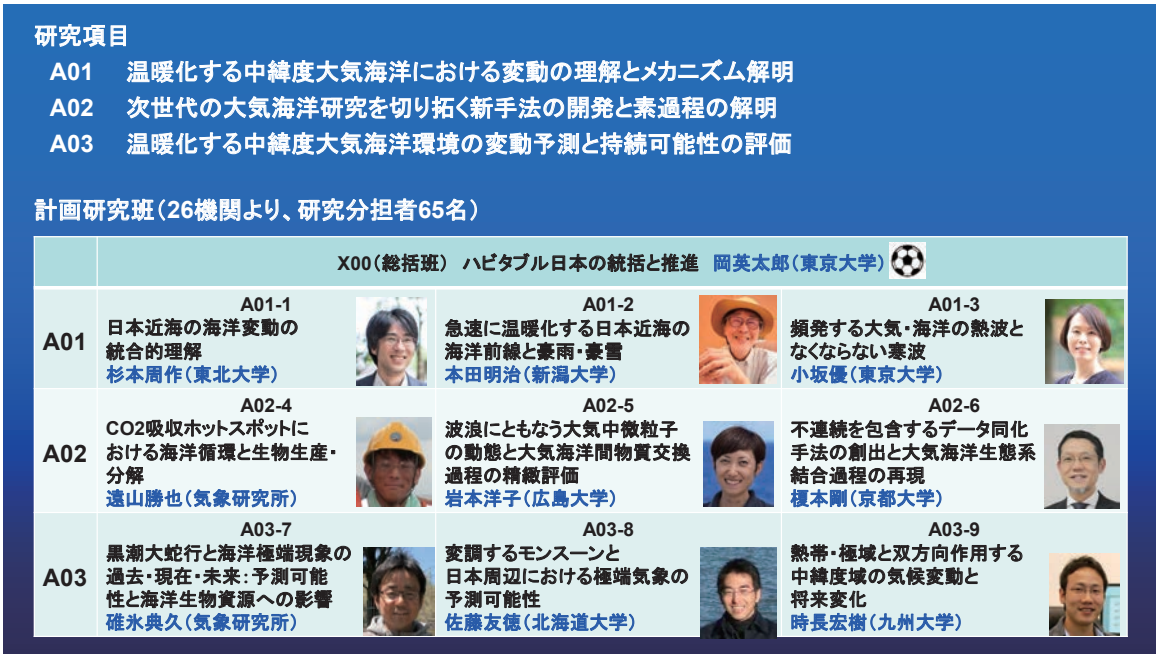


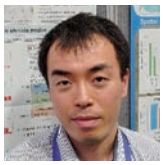
図 2　「ハビタブル日本」の班構造

も持続するのだろうか？」という問いに解答することを目指します。

「ハビタブル日本」は３つの研究項目から成り、各研究項目は３つの計画研究班から成ります（図２）。理解とメカニズム解明を目的とする研究項目 A01 では、日本周辺の海流の変動・変化を統合的に解明し、沿岸の海洋熱波や海洋生態系への影響を明らかにするとともに、日本海、三陸沖、九州南西の東シナ海における船舶集中観測により、海洋前線や海洋熱波が大気循環や降水に及ぼす影響を探ります。また、東アジア・北太平洋域における大気と海洋の広域の熱波・寒波を大気海洋結合現象と捉え、そのメカニズムを解明します。予測と持続可能性の評価を目的とする A03 では、黒潮の大蛇行や海洋熱波といった海洋極端現象の予測の可能性を評価し、海洋生物資源への影響を解明するとともに、温暖化に伴い変調するモンスーン、ならびにモンスーンに内在する豪雨や豪雪等の極端気象の予測に挑戦します。また、グローバルな視点から、熱帯・極域と双方向作用する中緯度の気候変動と将来変化を解明します。A01 の理解を A03 の予測につなげるためには、素過程の理解とモデル化が必要です。そこで A02 では、生物地球化学センサー搭載フロートを黒潮続流周辺域に展開し、海洋表層での生物生産・分解過程を解明するとともに、太平洋と日本海の離島２か所で連続観測を実施し、海面付近で波飛沫によって生じる微粒子が大気・海洋間の熱・物質交換過程に及ぼす影響を明らかにします。また、場に多く存在する不連続を包み込み、大気・海洋・海洋生態系結合過程をモデルで再現するためのデータ同化手法を創出します。

現在、これら計画研究班（A01-1－A03-9）と目的を共有し、密接に連携して研究活動を行う公募研究（第１期：2025－26 年度の２か年）を公募中です。また、「ハビタブル日本」を横断してセミナー、分野横断型勉強会、サマースクールなどの活動を行うボトムアップ的枠組として、１．若手研究者連絡会（通称：ECHOES）、２．異常天候ワーキンググループ（WG）、３．海洋顕著現象 WG の３つを設置していますが、これらはいずれも 30 代の若手研究者がリーダーを務め、「ハビタブル日本」外からも参加が可能です。新学術 Hotspot1・２で培った、ボトムアップを重んじる、自由で楽しい雰囲気を保ちながら、５年間の研究活動を勢力的に進めていきたいと思っております。ぜひ多くの方のご参加をお待ちしています。

「ハビタブル日本」ならびに公募研究の内容の詳細につきましては、Web サイト（https://hotspot3.aori.u-tokyo.ac.jp/）をご覧ください。



情 報 ①　若手渡航援助

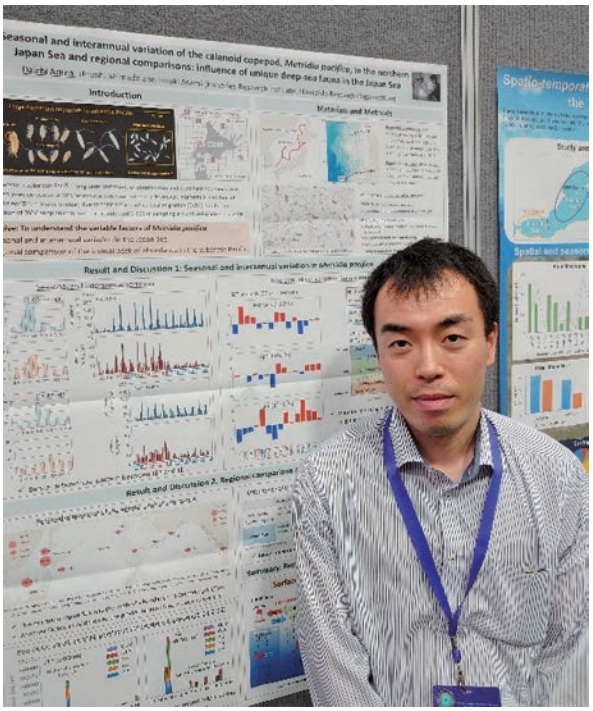
7th Zooplankton Production Symposium への参加報告

北海道立総合研究機構 中央水産試験場　有馬 大地

道総研中央水産試験場の有馬 大地と申します。この度は、日本海洋学会若手渡航援助により、オーストラリア・ホバートにて開催された第７回 Zooplankton Production Symposium に参加することができました。本シンポジウムは世界中の動物プランクトン研究者が集い、ワークショップが５件、セッションが 16 件、全部で 357 件の発表が行われました。300 人以上の参加者のうち半分以上が若手研究者で、男女比がほぼ半々だったのが印象的でした。

私は *Metridia pacifica* という北太平洋亜寒帯域で優占するカイアシ類の変動要因についてポスター発表を行いました。この種は大規模な日周鉛直移動を行うために、表層（0－150 m）のネット採集では定量評価が困難な種であるため、北部日本海における 0－500 mのモニタリングデータから季節・経年変動比較や海域間比較を行い、その要因を考察しました。様々な研究者と意見を交わし、他海域での Metridia 属カイアシ類の知見や生物多様性が与える影響などを議論しました。特にアラスカ大学の Russell Hopcroft 氏とは日本海とアラスカ湾の環境の違いによる M. pacifica の季節性や生活史の変化を議論でき、貴重な経験を得ることができました。

今回は自分の発表以外に、PlanktoScope の開発コアメンバーである Fabien Lombard 氏と意見交換することも大きな目的でした。PlanktoScope は、近年発表された安価に自作可能な植物プランクトン画像データ取得装置です。私はこの装置作成とデータ取得に取り組み、昨年 Ecotaxa という WEB データベースに登録したのですが、それを Lombard 氏が評価していたらしいと、当時彼の下で研修中だった研究協力者からお聞きしていました。今回 Lombard 氏はその PlanktoScope についてポスター発表しており、声をかけ自己紹介したところ、「Oh! Daichi!」との反応で、私の名前を認識されていたことに大変驚きました。私の想像以上に北海道周辺のデータに興味を抱いたようで、今後の研究展開や PlanktoScope について有意義な意見交換ができました。国際的な場で活躍する研究者からの評価は大変喜ばしいため、データを早くまとめて投稿すべきと再認識しました。



筆者とポスター

PlanktoScope に関連して今回実感したことが、プランクトンイメージングの急速な発展で、意識的に知見のインプットを継続する必要があると感じました。一方で、長期モニタリングのワークショップでは予算、人手、データ管理などの問題が万国共通の悩みであることも実感しました。北海道でモニタリングを行う立場としても、それぞれの担当者の考えや悩みについて大変参考になりました。

道総研で働き始めてから初の国際学会で不安も大きかったですが、分野問わず大変勉強になり沢山の刺激も頂け貴重な経験を得ることができました。このような機会を与えて下さった日本海洋学会へ改めて感謝を申し上げます。

ポスター会場の写真（コーヒーブレイク中）

情 報 ②　2023 年度 青い海助成事業

「第 20 回 国際有害有毒藻類学会」の運営を通じた若手人材の育成

第 20 回国際有害有毒藻類学会 実行委員　小原 静夏

2023 年度の日本海洋学会青い海助成事業として「第 20 回国際有害有毒藻類学会の運営を通じた若手人材の育成」を申請し、採択・助成いただきました。若手会員の海外渡航支援等、日本海洋学会では若手の研究をサポートする様々な制度がありますが、今回は学生会員が国際会議の運営に携わることで海外の研究者と交流しやすくなる機会を提供することを目的として本取り組みを実施しましたので、簡潔にご報告します。

1．本申請の背景

国際会議は博士課程の学生にとって良き修行の場ですが、一方で金銭的な事情により参加を躊躇したり諦めてしまったりするケースは少なくありません。近年は大学や学会などで旅費や参加費を助成する制度は増えているものの（実際に日本海洋学会の助成によって海外渡航された若手会員も多いことでしょう）、条件によっては援助を得られない場合もあります。特に国内で開催される国際会議の場合、参加費は国内会議と比べて高い一方で、海外渡航を伴わないため助成を受けられないケースが多くあります。

また若手、特に学生が学会運営に携わる機会はそう多くありませんが、学会運営側として学会に参加することは学生にとって成長の場でもあります。トラブル対応等を通じて自然と国内外の研究者と交流する機会を得られたり、本格的に学会運営に携わる前のトレーニングになったりもします。実際に、本報告を担当している私も、学部生時に国内会議の運営に関わる機会があり、今回の国際会議ではそのときの経験が多方面で役立ったと感じています。

今回は学生会員に対し、国内で開催される国際会議の参加費の一部を助成するとともに、学会運営の一部を補助する機会をつくるため、日本海洋学会青い海助成事業に申請しました。

2．本大会について

国際有害有毒藻類学会（International Conference on Harmful Algae: ICHA）は、UNESCO の要請を受けて設立された国際有害有毒藻類学会（International Society for the Study of Harmful Algae：ISSHA）が主体となって隔年開催されている国際会議です。今回が第 20 回大会となり、正式名称は 20th International Conference on Harmful Algae Hiroshima 2023 です。日本では 1995 年に第 7 回大会が仙台市で開催されて以来 28 年ぶりの開催であり、広島市にあるグランドプリンスホテル広島にて 2023 年 11 月 5 日－10 日まで開催しました（写真 1）。本会議は、海洋および河川・湖沼に発生し人間や水生生物に致死的な影響を及ぼす有害・有毒藻類（Harmful Algal Blooms: HABs）に関して学術的な研究交流をし、水産業等に対する赤潮・貝毒の被害軽減、安全な水産物の流通と消費、飲料水の確保などについて国際的な理解を深め、方策を決める場であります。また、研究成果の社会・一般市民への還元も重視しています。今回の広島大会では、人と海の共存（HAB Science and Human Well-being）をテーマに、「里海（Satoumi）コンセプト」の下で、世界とつながる海の持続的利用に関して国際的なメッセージ発信の場となることが期待されていました。2018 年に開催された第 18 回大会以降、5 年振りの対面開催となった今大会では、39 ヶ国から 495 名もの

写真 1　会場玄関（大会看板とともに）

研究者や行政関係者らが参加しました。学会の詳細な様子については、日本プランクトン学会報 71 巻 1 号をご参照ください。

3．助成対象学生が実施した運営業務

今回は日本海洋学会の学生会員 2 名（広島大学の矢野 諒子会員および東京海洋大学の Jiang Qiao 会員、いずれも大会開催時は博士後期課程）の参加費の一部を補助し、各々ポスターにて日頃の研究成果を発表しました。ポスターセッションでは、大会参加者らと自身の研究について議論を重ねていました（写真 2、3）。今回助成対象となった 2 名には大会初日に開催された若手研究者のための交流イベント「Young Investigator Networking Session」の受付および運営業務を担当していただきました。本イベントは、海外での発表経験が少ない若手会員が初日に交流し仲を深め、その後の大会でも研究交流しやすくなるための行事であり、ICHA においては毎回のように開催されています。今回助成対象となった 2 名には参加者としても本イベントに参加してもらいました。総勢 40 名程が本イベントに参加し、二人も積極的に交流し、新しい友人もできたようでした。このセッションのサポートに加え、彼女らには会期中、タイムキーパー等の運営業務を少し手伝っていただきました。

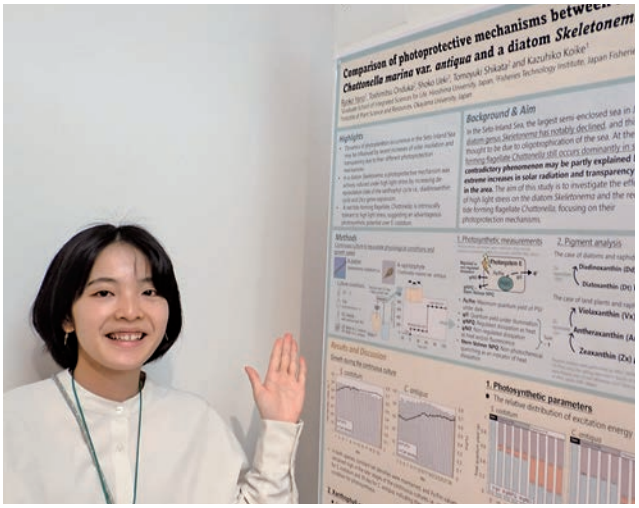


写真 2　矢野 諒子会員とポスター

4．成果と今後

本取り組みでは、学生会員 2 名の国際会議参加の補助し、学会運営に携わる機会を提供できました。会期中両名は若手、ベテラン問わず数多くの研究者と積極的に会話する様子がみられ、本サポートによるポジティブな影響は少なからずあると考えています。また今回お二人に担当していただいた運営業務はごく一部のみでしたが、参加者が困っている様子をみると自ら話しかけに動いたり、会場内を道案内したりと、運営業務時間以外でも運営側として意識をもつことができたようです。「学会運営」と聞くとハードルが高く、大変な業務であるように聞こえますが（実際に中心的な運営業務はとんでもなく労力と時間を要する業務ではあるのですが）、学生のうちから運営側として学会に参加することで、学生自身が他の参加者と交流しやすくなるだけではなく、実際に将来学会を運営する場合にも取り組みやすくなるのではないかと思います。若手会員、特に学生会員の皆様には、機会があれば学会参加に加えて、学会運営補助にも挑戦していただきたいと思います。

最後になりましたが、本取り組みをサポートいただいた日本海洋学会青い海助成事業および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

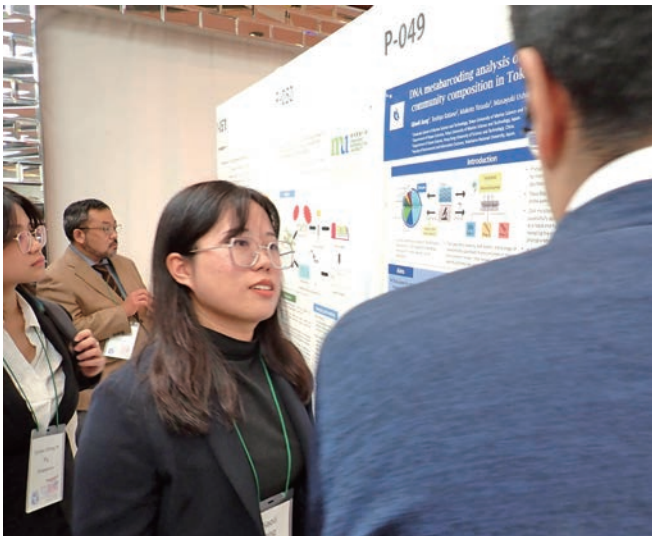
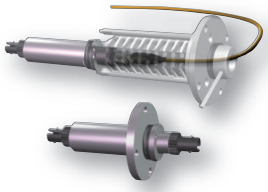


写真 3　Jiang Qiao 会員（ポスター発表の様子）

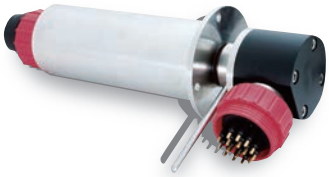
取扱い製品〈水中シリーズ〉

FOCAL
フォーカル社
（カナダ）

光通信用 ロータリージョイント



水中スリップリング



光モニタリングシステム &マルチプレクサ

Tritech
Official Distributor

トライテック社
（イギリス）

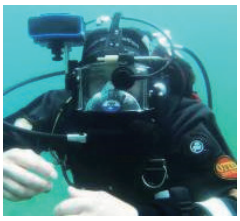
超小型軽量水中ソナー

Micron Gemini

Gemini 1200 ik

DMD ダイバーマウントディスプレイ

Micron Sonar



GISMA
STECKVERBINDER GMBH

ジスマ社
（ドイツ）

水中コネクタ　防水から深海まで

Series 80

Series 10

Series 35

Series 40

MacArtney
UNDERWATER TECHNOLOGY

マッカートニー社
（デンマーク）

水中コネクタ　SubConnシリーズ

Circularシリーズ

イーサネット用

パワー用

丸紅エレネクスト株式会社

製品に関するご質問等は弊社営業担当までご連絡ください。
t-omata@m-elenext.co.jp

情 報 ③

対面での開催復活！ 第29・30回「海のサイエンスカフェ」開催報告

教育問題研究会　（愛媛大学） 大林 由美子／（北海道大学） 上野 洋路

教育問題研究会主催の「海のサイエンスカフェ」は、年2回程度開催しています。人が集まり、飲食を伴い、みんなで話そうというコンセプトのサイエンスカフェは、コロナ禍での禁止事項三つ揃いでしたのでしばらく自粛し、オンラインでの「海のサイエンスカフェ」を実施してきました。オンラインでの開催は、どこにいても参加できるというメリットがあり、2022年にはアメリカと日本をつなぐオンラインサイエンスカフェを実施できました。コロナによる規制が解け、2023年9月、京都での秋季大会完全対面開催に合わせて、海のサイエンスカフェも4年ぶりに対面での実施を再開しました。この記事では、第29回(2023年9月・京都)と第30回(2024年6月・極地研)の「海のサイエンスカフェ」についてご報告します。

第29回海のサイエンスカフェは、京都を中心にサイエンスコミュニケーターとして活動をされている出村 沙代さん(株式会社たがやす)にご協力(共催)いただき、2023年9月24日㈰午前に、京町家を改装した「喫茶さろん淳平」の二階和室をお借りして開催しました。和室での開催は初めてです。高木 悠花さん(当時 千葉大、現 東大大気海洋研)に「小さなプランクトンたちの助け合い？共生する海の生き物たちの不思議な世界と環境変動」と題した話題提供をいただきました。和室であること、高木さんもお子様連れであることから、海のサイエンスカフェとしては初めて、キッズスペースを設けるという試みも実施しました。当日は、高校生以上が29名(高木さん、出村さん、教育問題研究会員5名を含む)にキッズが5名と、沢山の方が来てくださってやや手狭になってしまい、大人もキッズも入り乱れた状態になってしまいましたが、和気あいあいとした空気の中で高木さんの話題を中心に大いに盛り上がりました。さらに、出村さんが、そうした話題や盛り上がりの様子を壁に貼った大判紙にリアルタイムで絵にしていくグラフィックレコーディングを実施してくださいました！グラレコ、とてもステキで、ほれぼれしてしまいます。あとから振り返って思い出すことも、参加できなかった人に様子を伝えることもできます。この紙面にも写真を掲載しますので、当日の話題と雰囲気を感じとっていただければ幸いです。

高木さん、出村さん、株式会社たがやすの皆さま、準備から当日まで、大変お世話になりました。楽しいサイエンスカフェを作ってくださり、ありがとうございました。

第30回海のサイエンスカフェは、北極域研究加速プロジェクト(ArCS II)の代表機関を務める国立極地研究所との共催で、2024年6月15日㈯14－16時に東京都立川市にある「国立極地研究所談話室サザンクロス」で実施しました。「北極海にひろがるプラスチック汚染」のタイトルで海洋研究開発機構の池上 隆仁さんに話題提供をお願いし、ArCS IIサイエンスコミュニケーターの毛利さんと上野が進行を務めました。

趣旨説明と参加者自己紹介の後、池上さんに海洋プラスチックの基礎から、北極海に関する豆知識までさまざまな話題を提供していただきました。休憩の後、4－6名に分かれて15分ほどグループ討論を行い、その結果を全体で共有して終了しました。話題提供時、また、カフェ終了後にも非常に多くの質問があり、海洋プラスチック問題への関心の高さがうかがわれました。参加者には、小・中・高・大学生、学校の先生、海洋プラスチック問題に実際に取り組んでいる方の参加、遠方からの参加もありました。討論の時間には、皆さん積極的に発言され、その豊富な知識と理解に大いに刺激を受けました。

30回は、カフェではなく比較的広めの談話室を使用しましたので、過去の開催時よりもやや多めの定員を設定しました。情報公開後すぐに多数の応募があり、実施日の3週間前に定員に達し、実際に29名の参加がありました。過去のサイエンスカフェと同様に、参加者自己紹介(サイエンスカフェに来た理由、興味)を行ったのですが、参加人数が多かったため、話題提供までの時間が長くなってしまったことが反省点です。とは言え、最初の自己紹介が、

出村 沙代さんによる、第29回「海のサイエンスカフェ」のグラフィックレコーディング

活発なグループ討論のきっかけの一つになったと考えています。また、グループ討論に関しては、教育問題研究会員(今宮さん、丹羽さん、大林)だけでなく、ArCS II の榎本さん、毛利さんにも参加いただき、1 グループあたりの人数を抑えることができたことも活発なグループ討論に繋がったものと思います。

今回は、会場だけでなく、企画・運営、参加者集めなどさまざまな点で、極地研広報室・ArCS II の皆さんに大変お世話になりました。ありがとうございます。何よりも魅力的な話題提供をしていただいた池上さん、ありがとうございました。

第 30 回「海のサイエンスカフェ」で話題提供する池上さん：中央左(提供：国立極地研究所)

情報 ④

Journal of Oceanography 目次

Journal of Oceanography

Volume 80 · Number 3 · June 2024

ANNOUNCEMENT

Journal of oceanography most cited paper award 2024
H. Saito **161**

ORIGINAL ARTICLES

Primary productivity impacts community structure of euphausiids in the low-latitude Indian and Pacific Oceans
F. Zhou · J. Hirai · T. Saito · S. Horii · K. Takahashi · A. Tsuda **163**

Future changes in marine heatwaves based on high-resolution ensemble projections for the northwestern Pacific Ocean
Y. Kawakami · H. Nakano · L. S. Urakawa · T. Toyoda · K. Sakamoto
S. Nishikawa · T. Sugiyama · M. Kurogi · Y. Ishikawa · K. Sato
G. Yamanaka **177**

Temporal variation of the 2017 Kuroshio large meander based on repeated surveys along 138° E
D. Ito · Y. Shimizu · T. Setou, A. Kusaka · D. Ambe, Y. Hiroe
K. Hidaka, S. Sogawa · T. Yamaguchi **197**

Seasonal variation in pore water nutrients and their fluxes from the bottom sediments in Harima Nada, Seto Inland Sea
M. Nakakuni · H. Yamaguchi · K. Ichimi · K. Tada **219**

CORRECTION

Correction to: Synchronized interdecadal variations behind regime shifts in the Pacific Decadal Oscillation
M. Hamamoto · I. Yasuda **233**

Correction to: Estimate of turbulent energy dissipation rate using free-fall and CTD-attached fast-response thermistors in weak ocean turbulence
I. Yasuda · S. Fujio · D. Yanagimoto · K. J. Lee · Y. Sasaki · S. Zhai
M. Tanaka · S. Itoh · T. Tanaka · D. Hasegawa · Y. Goto · D. Sasano
235

Correction: The behaviour of aluminium, manganese, iron, cobalt, and lead in the subarctic Pacific Ocean: boundary scavenging and temporal changes
C-Y. Chan · L. Zheng · Y. Sohrin **237**

情 報 ⑤

Oceanography in Japan「海の研究」目次

33 巻 3,4 号 2024 年 7 月

［2020 年度日本海洋学会賞受賞記念論文］

微量金属による海洋一次生産の制御機構に関する生物地球化学研究　武田 重信

P31-46, 2024, doi: 10.5928/kaiyou.33.3-4_31

［解　説］

日本最初の海洋調査船「天鷗丸」の航跡と功績　黒田 一紀

P47-63, 2024, doi: 10.5928/kaiyou.33.3-4_47

情 報 ⑥

Bulletin on Coastal Oceanography「沿岸海洋研究」目次

62 巻 1 号

［原　著］

津軽海峡－陸奥湾の流体振動系における固有振動モード…… 久田 雄介・磯田 豊　1

［総　説］

水質改善しても貧酸素は無くならない…… 山本 民次　15

Extended Abstract

シンポジウム「閉鎖性水域における貧酸素水塊の現状と未来 －長期変化と物質循環との関わり－」のまとめ …… 速水 祐一・小林 志保　27

海底堆積物表層の微生物群集と貧酸素水塊の相互作用…… 森 郁晃・和田 実　29

底層溶存酸素量に係る環境基準の水域類型の指定について…… 菊地 優也　33

琵琶湖における底層溶存酸素量の現状と環境基準の設定について

…… 岡本 高弘・小笠 原翔・奥居 紳也・南 真紀・石﨑 陽平・石川 可奈子・藤原 直樹・永田 貴丸・井上 栄壮・霜鳥 孝一　37

東京都の地先海域における水質の鉛直分布と貧酸素水塊の発生状況について…… 安藤 晴夫　43

大阪湾の水温、塩分および底層溶存酸素濃度の長期変動について…… 近藤 健・秋山 諭　47

七尾湾における貧酸素の現状と養殖貝類への影響…… 仙北屋 圭　51

全国各地の閉鎖性海域における底層 DO の長期トレンド…… 牧 秀明　55

有明海における貧酸素水塊発生への気候変動影響評価……矢野 真一郎・Lin HAO・丸谷 靖幸　59

記事…… 63

Vol. 62, No.1

Original

Eigen-Modes in the Fluid Oscillation System of Tsugaru Strait-Mutsu Bay …… HISADA Yuusuke and ISODA Yutaka　1

Review

Improvements in Water Quality Do Not Affect Oxygen Deficiency …… YAMAMOTO Tamiji　15

Extended Abstract

A Summary of the Symposium on “Present Feature and Future of the Hypoxic Water Mass in the Enclosed Waters -Long Term Change and Relationship with Material Cycle” …… HAYAMI Yuichi and KOBAYASHI Shiho　27

Interaction Between Sediment Microbial Community and Coastal Hypoxia ····· MORI Fumiaki and WADA Minoru 29
Designation of Types of Water Areas for Environmental Quality Standards Related to Dissolved Oxygen Concentrations in Bottom Water ····· KIKUCHI Yuya 33
Current Status of Bottom Layer Dissolved Oxygen (DO) of Lake Biwa and Establishments of Environmental Quality Standards of Bottom Layer DO ····· OKAMOTO Takahiro, OGASAWARA Sho, OKUI Shinya, MINAMI Maki, ISHIZAKI Yohei, ISHIKAWA Kanako, FUJIWARA Naoki, NAGATA Takamaru, INOUE Eisou and SHIMOTORI Koichi 37
Vertical Profile of Water Quality and the Occurrence of Hypoxic Water Masses in the Coastal Sea Area of Tokyo Metropolis ··· ANDO Haruo 43
Long-term Variations in Water Temperature, Salinity, and Bottom Layer Dissolved Oxygen Concentration in Osaka Bay ····· KONDO Ken and AKIYAMA Satoshi 47
Current Status of Hypoxia in Nanao Bay and its Impact on Cultured Shellfish ····· SENBOKUYA Kei 51
Long-Term Trends of Bottom-Layer Dissolve Oxygen in Enclosed Coastal Seas in Japan ····· MAKI Hideaki 55
Assessment of Climate Change Effects on Hypoxia in the Ariake Sea ····· YANO Shinichiro, HAO Lin, MARUYA Yasuyuki 59

Proceedings ····· 63

情 報 ⑦

「海洋学関連行事カレンダー」

JOSNL編集委員　杉本 周作

日本プランクトン学会・日本ベントス学会 合同大会 2024
日程：2024 年 9 月 13 日㈮－16 日㈪
会場：ハイブリッド開催［島根大学松江キャンパス（島根県松江市）］
ウェブサイト：https://sites.google.com/view/plaben2024

雪氷研究大会 2024
日程：2024 年 9 月 16 日㈪－19 日㈭
会場：アモーレ長岡（新潟県長岡市）
ウェブサイト：https://www.seppyo.org/activity/meeting/

日本海洋学会 2024 年度 秋季大会
日程：2024 年 9 月 16 日㈪－20 日㈮
会場：東京海洋大学品川キャンパス（東京都品川区）
ウェブサイト：https://www.jp-c.jp/jos/2024FM/

令和 5 年度 日本水産学会 秋季大会
日程：2024 年 9 月 24 日㈫－27 日㈮
会場：京都大学吉田キャンパス（京都府京都市）
ウェブサイト：https://jsfs.jp/act/annual-meeting/

日本流体力学会 年会 2024
日程：2024 年 9 月 25 日㈬－22 日㈮
会場：フォレスト仙台（宮城県仙台市）
ウェブサイト：https://www2.nagare.or.jp/nenkai2024/

PICES 2024 Annual Meeting
日程：2024 年 10 月 26 日㈯－11 月 1 日㈮
会場：Honolulu, Hawaii, USA
ウェブサイト：https://meetings.pices.int/meetings/annual/2024/pices/scope

The 6th WCRP International Conference on Reanalysis
日程：2024 年 10 月 28 日㈪－11 月 1 日㈮
会場：東京大学伊藤国際学術研究センター（東京都文京区）
ウェブサイト：https://confit.atlas.jp/guide/event/icr6/top

SOLAS Open Science Conference 2024
日程：2024 年 11 月 10 日㈰－14 日㈭
会場：Goa, India
ウェブサイト：https://solas-osc-2024.nio.res.in

気象学会 2024 年度 秋季大会
日程：2024 年 11 月 12 日㈫－15 日㈮
会場：つくば国際会議場（茨城県つくば市）
ウェブサイト：https://sites.google.com/metsoc.or.jp/atm2024/home

Ocean Predict Symposium 2024
日程：2024 年 11 月 18 日㈪－22 日㈮
会場：Paris, France
ウェブサイト：https://oceanpredict.org/events/op24/#event-home

2024 年度 水産海洋学会
日程：2024 年 11 月 22 日㈮－24 日㈰
会場：（静岡県静岡市）

第 15 回 極域科学シンポジウム
日程：2024 年 12 月 3 日㈫－5 日㈭
会場：国立極地研究所（東京都立川市）
ウェブサイト：https://www.nipr.ac.jp/symposium2024/

第 1 回 北極域研究船「みらい II」シンポジウム

日程：2024 年 12 月 5 日㈭
会場：ハイブリッド開催［極地研究所（東京都立川市）］

AGU Fall Meeting 2024

日程：2024 年 12 月 9 日㈪－13 日㈮
会場：Washington, D.C., USA
ウェブサイト：https://www.agu.org/annual-meeting

The 105th AMS Annual Meeting

日程：2025 年 1 月 12 日㈰－16 日㈭
会場：New Orleans, Louisiana, USA
ウェブサイト：https://annual.ametsoc.org/index.cfm/2025/

JpGU2025

日程：2025 年 5 月 25 日㈰－30 日㈮
会場：幕張メッセ（千葉県幕張市）
ウェブサイト：https://www.jpgu.org/

学会記事 ①

2024 年度 日本海洋学会 春季大会 実施報告

大会実行委員会 委員長 （東北大学） 安中 さやか

大会日程：2024 年 5 月 26 日㈰－31 日㈮
ハイブリッド開催　現地会場：幕張メッセ
大会実行委員会　委員長：安中 さやか（東北大学）

1．春季大会の概要

2024 年度日本海洋学会春季大会は、日本地球惑星科学連合（JpGU）の大会において行われました。

2．大会の開催について

2024 年の JpGU 大会は、現地（幕張メッセ）とオンラインを併用したハイブリッド開催となりました。

3．セッション・講演数

セッション数は 229 件（前年 234 件）でした。日本海洋学会の学協会セッション（共催セッション）は 25 件（前年 25 件）で、これらのセッションでの発表件数は 543 件（前年 505 件）でした。

大会は、JpGU 大会ではなじみのある Confit システムをベースとして行われました。口頭発表は現地会場とオンライン会議システム Zoom を用いて行われました。ポスター発表は、現地会場での掲示と立ち合い説明に加え、口頭セッションでのフラッシュトーク、Confit のコメント機能を用いて質疑応答も実施されました。

4．学会の会合

通常、春の学会期間中に行われている各種委員会等の会合は、大会開催前の 4 月から 5 月にかけて Zoom を用いたオンライン会議や書面などにて開催されました。日本海洋学会春季評議員会は 5 月 27 日㈪ 17：30－19：00 に現地会場および Zoom のハイブリッドで開催されました。日本海洋学会会員集会は 5 月 29 日㈬ 17：30－19：00 に現地会場および Zoom のハイブリッドで開催されました。

5．表彰式

5 月 29 日㈬に表彰式が行われました。2024 年度に JpGU フェローの称号を授与された方々が表彰されました。また、三宅賞、国際貢献賞の表彰も行われました。

JpGU2024 大会のウェブページ（JpGU 提供）

6. 展示

民間企業や大学、研究機関等による展示は現地とオンラインブースのハイブリット形式で実施されました。現地では、一般展示 61 件、大学・研究機関 12 件、書籍出版、関連商品 15 件、学会・学術団体 8 件が展示されました。オンラインでは、8 件が展示されました。

日本海洋学会も広報委員会が中心となってブース出展を行い、海洋学に関する資料や書籍の展示、学会パンフレットやニュースレターの配布、定期刊行物の展示などを行いました。分野外の方々へのアウトリーチ、高校生や学部生に対するリクルートを行うとともに、会員同士の情報交換の場を提供しました。以下、広報委員長・川合 美千代さんからの報告です。

「多くの訪問者といろんな話をすることができました。 今年も高校生や学部生が多かったです。新企画として「求人情報一覧」「学生と会員のマッチング」を実施し、『若者の相談に乗ります』ののぼりを掲げました。数は多くなかったですが、若者の進路選択の後押しに少しは貢献できたのではないかと思います。今後も JpGU ならではの貴重な広報活動の場として活用していきたいと考えています。今回の企画に参加してくださった会員の皆さまに御礼申し上げます。」

日本海洋学会の展示(川合 美千代会員提供)

7. イベント

大会期間中には、一線で活躍する研究者へのインタビューを行うトークイベント、ランチタイムスペシャルレクチャー、スーパーレッスン等が行われたほか、JAXA-NASA の中高生向けの講演会が行われました。豪華景品がもらえる展示のクイズラリーも盛況だったようです。特に、パブリックデーとされた大会初日の 26 日㈰には、一般公開セッションを含む多くのイベントが開催され、一般参加の方々で賑わっていました。

8. 本大会を振り返って

2024 年の JpGU 大会は、現地とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。ハイブリット開催も回を重ね、大会期間中は大きなトラブルもなく、スムーズに大会が実施されたように思います。現地でのスタッフや座長の対応などに加えて、参加者の皆様が適切に情報を収集し、対応してくださったおかげと考えています。ご理解・ご協力頂いたことに改めてお礼を申し上げます。

研究発表は、現地のみ・オンラインのみの開催と遜色なかったように感じます。さらに、現地開催ならではの活発な議論を深める機会や、研究以外の交流を深める機会がもてたとともに、遠隔地からでもオンラインで気軽に参加視聴できるなど、ハイブリッドの利点が活かされていたと思います。

ポスター発表は、現地での掲示と立ち合い説明が基本とされ、コロナ禍以前の現地開催の雰囲気で、質疑応答や雑談などがなされていました。昨年は、ハイブリッド開催期間に、Zoom のブレイクアウトルーム機能を使ったオンラインポスターセッションが設けられましたが、参加する人が少なかったため、今年のオンライン対応は、Confit のコメント機能を用いた質疑応答になりました。また、ポスターセッションに先立ち、口頭セッションにフラッシュトークの時間が確保され、ポスター発表の概要を説明する場が設けられました。発表者側からも聴講者側からも好評でした。

今後も、多様な分野の研究者とともに一般の来場者とも交流できる規模の大きな春季大会と、いつもの仲間と密度の濃い時間を過ごせる秋季大会、それぞれの利点を活かした大会になればと思います。

9. 来年度の開催について

2025 年度の日本海洋学会春季大会も、JpGU 大会(5 月 25 日㈰－30 日㈮、幕張メッセ(予定))にて開催されます。例年では 10 月よりセッション提案募集、1 月より投稿受付が行われますので、積極的な提案・参加をお願いいたします。

学会記事 ②

2024 年度 日本海洋学会 春季会員集会 議事録

日本海洋学会 集会担当幹事　中野 英之

日時：2024 年 5 月 29 日㈬ 17：30－18：30
場所：幕張メッセ国際会議場 103 号室 および Zoom を利用したハイブリッド開催
出席者：現地参加 20 名、オンライン参加 20 名、計 40 名

1. 開会

中野理事より開会の宣言がなされた。

2. 会長挨拶　（江淵 会長）

江淵会長より挨拶があった。今年度より日本海洋学会が任意団体から一般社団法人となり、社員総会は総会から評議員会に移り、旧総会の後継となる会員集会は最高意思決定の場から学会員との意見交換の場となったことについて報告された。今回はポスター発表と重なったことなどにより現地参加人数が少なかったことから、今後の会員集会の開催方法について検討を行う予定と述べられた。

杉本名誉会員が瑞宝中綬章を受章したこと、石井 雅男会員、安

田 一郎会員、渡部 雅浩会員が令和 6 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受賞したこと、植松 光夫会員が The Oceanography Society(TOS)の Fellow に選出されたことについて報告され、祝意が示された。「統合全球海洋観測システム OneArgo の構築と海洋融合研究の推進」がロードマップ 2023 に採択されたことについて報告され、本提案の策定に協力いただいた会員の方々に感謝の意が表された。寺本 俊彦名誉会員の逝去、および能登半島地震の犠牲となられた方々に哀悼の意が表された。

3. 報告事項

1) 2023 年度の事業報告について　(岡(顕) 理事)

2023 年度の事業報告について報告された。

2) 2023 年度の決算報告および監査報告について

(野口 理事、神田 監事)

2023 年度の決算報告および監査報告について報告された。

3) その他

3-1) 名誉会員の推薦について　(岡(顕) 理事)

名誉会員の推薦について報告された。

3-2) 賞選考委員の委嘱について　(江淵 会長)

賞選考委員の委嘱について報告された。

3-3) 受賞記念講演の座長について　(岡(顕) 理事)

受賞記念講演の座長について報告された。

3-4) その他

環境科学賞の名称を宇野木環境科学賞へ変更を検討する方針について報告された。

評議員ならびに学会賞・岡田賞・宇田賞選考委員の任期途中での辞退があり、それぞれ直近の選挙の次点者最上位の会員を補充したことについて報告された。

4) 会務報告

庶務　2024 年度事業計画について　(岡(顕) 理事)

2024 年度事業計画について報告された。

会員数の動向について報告された。

会計　2024 年度予算案について　(野口 理事)

2024 年度予算案について報告された。

編集

① JO　(齊藤 編集委員長(書面))

JO Vol.79(1)から 80(2)までの発行状況、2023 年 1 月から 2024 年 3 月までの投稿・受理状況、特別セクションの編集状況、及び新設された Journal of Oceanography Most Cited Paper Award に 2 本の受賞論文を決定したことについて報告された

②海の研究　(久保川 編集委員長(書面))

2023 年度の実績及び 2024 年度の計画、活動方針について報告された。

③ JOS ニュースレター　(岩本 編集委員長(書面))

2023 年度の発行実績、ISSN を取得したこと、および 2024 年度の発行予定について報告された。

研究発表　(土井 理事)

- 2023 年度秋季大会が京都大学で対面形式にて開催されたことについて報告された。
- 2024 年度春季大会が JpGU2024 の中でハイブリッド形式にて開催されていることが報告された。
- 2024 年度秋季大会が水産資源研究所の会員により東京海洋大学品川キャンパスにおいて開催される予定であることについて報告された。
- 2025 年度春季大会が JpGU2025 で開催予定であることについて報告された。
- 2025 年度秋季大会が北海道大学函館キャンパスを開催地として実施予定であることについて報告された。

賞選考

学会賞・岡田賞・宇田賞　(石井 前委員長 (書面))

選考過程および選考結果について報告された。

日高論文賞・奨励論文賞　(東塚 前委員長 (書面))

選考過程および選考結果について報告された。

環境科学賞　(藤井 前委員長(書面))

選考過程および選考結果について報告された。

吉田賞　(池田 前委員長(書面))

選考過程および選考結果について報告された。

選挙管理　(中野 理事(書面))

各賞可否投票および賞選考委員選挙結果について報告された。

広報委員会　(川合 委員長(書面))

2023 年度の活動について新しい取り組みとともに報告された。2024 年度の活動予定について新しい取り組みと共に報告された。パンフレットの更新について報告された。

海洋環境委員会　(野口 委員長(書面))

2024 年度の委員会体制および、「青い海助成」事業に一件応募があり採択されたことが報告された。2023 年度採択事業の報告があった。詳細は JOS ニュースレターにも掲載予定。

海洋観測ガイドライン編集委員会　(長谷川 委員長(書面))

- 2023 年度は和文第 5 版の出版、英文第 5 版の収集・編集したことが報告された。
- 2024 年度は英文第 5 版の出版に向けた、改訂・追加事項の検討の予定であることが報告された。

西南支部　(中野 支部長(書面))

2023 年度はニュースレター 53 号の発行、ホームページの更新、維持管理、支部会連絡会等を実施したことが報告された。2024 年度の予定について報告された。

海洋環境問題研究会　(福田 研究会会長(書面))

海洋環境問題研究会の総会が 5 月 17 日開催され、福田会長の再任が報告された。秋季大会で 50 周年記念として本研究会主催のシンポジウムを開催する予定であることが報告された。2024 年度の活動予定について報告された。

沿岸海洋研究会　(磯辺 研究会会長(書面))

2024 年度の新体制および、活動予定について報告された。

海洋生物学研究会　(近藤 研究会会長(書面))

「海洋生物シンポジウム 2024」を 2024 年 3 月 14 日にハイブリッドにて開催したことについて報告された。また同日

運営委員会を開催したことが報告された。

教育問題研究会　**（川合 研究会会長（書面））**

2023 年度の活動報告および、2024 年度の活動予定について報告された。

リクルート戦略 WG　**（伊藤（幸）理事（書面））**

相談窓口の名称を「海洋系の大学・進路の相談窓口」に変更したことについて報告され、Google form を通じた進路についての問い合わせに 2023 年度から 2024 年度 5 月 15 日までに合計 37 件対応したことについて報告された。

IAPSO 委員会　**（升本 委員長（書面））**

学術会議の小委員会の再編に伴い発足したこと、今年度の新体制および活動予定、およびプサンでのジョイント会議の開催予定について報告された。

5）学界関連報告

学界動向　**（原田 副会長（書面））**

学界関連の動向について報告された。詳細については JOS ニュースレターに掲載される。国連海洋科学の 10 年への対応について、科学全分野対象の賞に学生や若手研究者の推薦を積極的に行っていくことについて報告された。「深海アルゴフロートの全球展開による気候・生態系変動予測の高精度化」は、旧マスタープラン 2020 の重点研究計画に採択されており、この申請をもとに、後継プロジェクトとして「統合全球海洋観測システム OneArgo の構築と海洋融合研究の推進」をロードマップ 2023 に申請し採択されたことが報告された。

日本海洋科学振興財団　**（原田 副会長（書面））**

日高論文賞の授与、海外渡航援助、海洋データ同化夏の学校のサポートについて今年度も実施予定であることについて報告された。

水産・海洋科学研究連絡協議会　**（江淵 会長）**

6 月 16 日に協議会が開催予定と報告された。

6）その他

- 一般社団法人で変わったことについて質問があった。
- 事業計画について現時点では報告だけとなっているので、評議員等のフィードバックの場が欲しいという意見があった。法人化後においては、新年度の開始前に事業案を決定する必要があることから、時間の都合上完全なフィードバックは難しいが、年度開始後の評議員会でも意見聴取を行いながら運用していきたいとの返答があった。
- 水産研究・教育機構 水産資源研究所水産試験の亀田事務局長より 2024 年度日本海洋学会秋季大会の挨拶があった。

日本海洋学会 2023年度 決算報告

（2023 年 4 月 1 日－2024 年 3 月 31 日）

収入の部

（単位：円）

科　目		予算額(A)	決算額(B)	差引額(B) − (A)	摘　要
1. 会費収入		**14,847,000**	**14,154,000**	**-693,000**	納入率：2024 年 2 月末会員数基準
2023 年 4 月～ 2024 年 3 月	通常会員会費	11,407,000	10,494,000	-913,000	954 人 / 1037 人
	通常会員会費（シニア）	608,000	608,000	0	76 人 / 76 人
	学生会員会費	792,000	912,000	120,000	152 人 / 132 人
	賛助会員会費	720,000	720,000	0	18 人 / 18 人
	団体会員会費	1,320,000	1,320,000	0	55 人 / 55 人
	終身会員会費	0	100,000	100,000	2 人
2. 事業収入		**1,073,000**	**817,000**	**-256,000**	
	広告収入	174,000	174,000	0	NL 掲載広告 2 件
	会誌売上収入	99,000	63,000	-36,000	海の研究 11 セット
	刊行物売上収入	0	0	0	
	JO 掲載料	800,000	580,000	-220,000	18 件（会員 20,000 円× 10、非会員 50,000 円× 7 ＋前年度不足分 30,000 円× 1）
3. 積立金		**2,223,000**	**1,234,323**	**-988,677**	
	環境科学研究助成	823,000	213,140		宇野木基金より
	吉田賞	1,400,000	1,021,183	-378,817	山形基金より
4. 雑収入		**2,726,079**	**2,876,554**	**150,475**	
	受入利息	3,000	1,179	-1,821	
	著作権料	2,723,079	2,875,375	152,296	springer 印税 253 万、JST12 万、JAC12 万
	その他	0	0	0	
5. 寄附金		**300,000**	**1,757,214**	**1,457,214**	
	日本海洋科学振興財団	200,000	200,000	0	
	海ロマン 21	100,000	100,000	0	
	大会開催戻り金	0	1,457,214	1,457,214	2023 年秋季
6. 学会基本金から一時繰入		0	0	0	
小　計		**21,169,079**	**20,839,091**	**-329,988**	
前期繰越金		**24,446,960**	**24,446,960**	**0**	
合　計		**45,616,039**	**45,286,051**	**-329,988**	

支出の部

（単位：円）

科　目		予算額(A)	決算額(B)	差引額(B) − (A)	摘　要
1. 管理費		**8,900,000**	**8,116,948**	**-783,052**	
	業務委託費	6,800,000	6,813,028	13,028	事務局 2023 年 3 月～ 2024 年 2 月
	会議費	310,000	57,181	-252,819	お茶代
	旅費交通費	800,000	130,828	-669,172	
	通信運搬費	320,000	354,558	34,558	
	消耗品費	250,000	336,711	86,711	コピー代
	雑費	420,000	424,642	4,642	筆耕代を含む
2. 事業費		**11,695,000**	**10,094,319**	**-1,600,681**	
	大会開催費	1,000,000	1,000,000	0	
	海洋環境問題研究会	100,000	73,004	-26,996	サーバ・シンポジウム経費
	教育問題研究会	100,000	106,940	6,940	Zoom、サイエンスアゴラ、サイエンスカフェ
	海洋生物学研究会	285,000	176,801	-108,199	シンポジウム
	女子中高生夏の学校経費	50,000	43,346	-6,654	幹事交通費
	JO 発行経費	1,200,000	1,100,000	-100,000	Vol.80 制作費、編集委員会費 0 円
	海の研究発行経費	1,400,000	811,684	-588,316	6 号 3 回分（合併）、編集委員会費を含む、32-2 号作成分含む
	J-STAGE 公開経費	100,000	0	-100,000	
	JOS ニュースレター発行経費	1,500,000	1,490,000	-10,000	通常号 4 回分
	広報委員会	140,000	116,375	-23,625	JpGU2023 ブース出展料、サイト維持管理料
	会誌送料	1,000,000	898,224	-101,776	発送 8 回＋追加分 1 回、NL12-4 号含む
	会員名簿発行費	270,000	263,340	-6,660	名簿 web システム運営費
	送金手数料費	70,000	66,594	-3,406	
	学会賞金	900,000	900,000	0	日高論文賞 10 万× 2：日本海洋科学振興財団、奨励論文賞 5 万× 2：海ロマン 21、環境科学賞 10 万：宇野木基金
	メダル製作費	710,000	662,673	-47,327	吉田賞制作、各賞名前印字　環境科学賞分：宇野木基金、吉田賞分：山形基金
	海外招へい費用	500,000	360,000	-140,000	吉田賞受賞者旅費（山形基金より）
	若手集会助成金	300,000	268,568	-31,432	3 件
	若手研究者海外渡航援助	400,000	900,000	500,000	8 名
	青い海助成事業	600,000	101,650	-498,350	1 件　宇野木基金
	大会ウェブサイト改修費	150,000	125,400	-24,600	
	法人化関連経費	800,000	517,720	-282,280	設立費用一式
	日本地球惑星科学連合会費	10,000	10,000	0	
	地学オリンピック協賛金	50,000	50,000	0	
	防災学術連携体会費	30,000	30,000	0	
	男女共同学協会連絡会分担金	15,000	15,000	0	
	連絡会シンポジウム経費	15,000	7,000	-8,000	
小　計		**20,595,000**	**18,211,267**	**-2,383,733**	
3. 予備費		**25,021,039**	**0**	**-25,021,039**	
4. 一般社団法人日本海洋学会へ寄付		**0**	**27,074,784**	**27,074,784**	
次期繰越金		**0**	**0**	**0**	
合　計		**45,616,039**	**45,286,051**	**-329,988**	

一般社団法人 日本海洋学会 正味財産増減計算書

（2024 年 1 月 22 日－2024 年 3 月 31 日）

科　目		予算額(A)	決算額(B)	差引額(B) – (A)
Ⅰ．一般正味財産増減の部				
経常増減の部				
(1) 経常収益				
受取寄付金				
	日本海洋学会	0	27,074,784	27,074,784
	日本海洋学会（大会用口座）	0	2	2
	日本海洋学会（学会基本金・積立金）	0	26,157,573	26,157,573
	海洋環境問題研究会	0	2,253,029	2,253,029
	教育問題研究会	0	47,448	47,448
	沿岸海洋研究会	0	4,234,259	4,234,259
経常収益計		**0**	**59,767,095**	**59,767,095**
(2) 経常費用				0
	法人税等	0	11,600	11,600
経常費用計		0	11,600	11,600
当期一般正味財産増減額		0	59,755,495	59,755,495
一般正味財産期首残高		0	0	0
一般正味財産期末残高		**0**	**59,755,495**	**59,755,495**
Ⅱ．指定正味財産増減の部				
当期指定正味財産増減額		0	0	0
指定正味財産期首残高		0	0	0
指定正味財産期末残高		0	0	0
Ⅲ．正味財産期末残高		**0**	**59,755,495**	**59,755,495**

一般社団法人 日本海洋学会 2024年度 収入予算書

（2024 年 4 月 1 日－2025 年 3 月 31 日）

一般会計

収入の部

（単位：円）

科　目	2022 年度 予算額(A)	2023 年度 予算額(B)	差引増減額 (B) – (A)	備　考
1. 会費収入	**0**	**16,342,000**	**16,342,000**	2024 年 1 月末時点（任意団体）会員数
通常会員会費	0	11,297,000	11,297,000	年会費 11,000 会員 1,027 名 納入率 100%
通常会員会費（シニア）	0	616,000	616,000	年会費 8,000 会員 77 名 納入率 100%
学生会員会費	0	441,000	441,000	年会費 3,000 会員 147 名 納入率 100%
賛助会員会費	0	720,000	720,000	年会費 40,000 会員 18 名 納入率 100%
団体会員会費	0	1,248,000	1,248,000	年会費 24,000 会員 52 名 納入率 100%
準会員会費	0	2,020,000	2,020,000	沿岸研究会予算から計上
2. 事業収入	**0**	**7,005,000**	**7,005,000**	
広告収入	0	234,000		内訳は下記
学会本体	0	174,000	174,000	NL4 回：2 社
沿岸海洋研究会	0	60,000	60,000	沿岸海洋研究 30,000 × 2 ＝ 2 60,000
会誌売上収入	0	91,000		内訳は下記
学会本体	0	81,000	81,000	海の研究 9,000 × 9 ＝ 81,000
沿岸海洋研究会	0	10,000	10,000	BN 5,000 × 2 ＝ 10,000
刊行物売上収入	0	0	0	要旨集 3,500 × 0 ＝ 0
秋季大会収入	0	5,880,000		内訳は下記
参加費	0	2,900,000	2,900,000	2023 年度参考
発表申込料	0	250,000	250,000	
懇親会費	0	1,200,000	1,200,000	
協賛等	0	1,530,000	1,530,000	
JO 掲載料	0	800,000	800,000	
3. 積立金	**0**	**1,626,000**	**1,626,000**	
環境科学研究助成	0	913,000	913,000	積立金より（助成金 3 件 60 万、環境科学賞副賞 10 万、委員会費含む）
吉田賞	0	713,000	713,000	積立金より（賞状委員会費 20 万円）
4. 雑収入	**0**	**2,428,000**	**2,428,000**	
受入利息	0	3,000	3,000	学会基本金等利息
著作権料	0	2,425,000	2,425,000	
5. 寄付金	**0**	**300,000**	**300,000**	
寄付金	0	300,000	300,000	海ロマン 21 100,000 日本海洋科学振興財団 200,000
小　計	**0**	**27,701,000**	**27,701,000**	
6. 前期繰越金	**0**	**31,469,454**	**31,469,454**	
合　計	**0**	**59,170,454**	**59,170,454**	

一般社団法人 日本海洋学会 2024年度 支出予算書

（2024 年 4 月 1 日－2025 年 3 月 31 日）

一般会計

支出の部

（単位：円）

科　目	2022 年度 予算額(A)	2023 年度 予算額(B)	差引増減額 (B) – (A)	備　考
1. 管理費	**0**	**10,384,000**	**10,384,000**	
業務委託費	0	8,000,000		内訳は下記
学会本体	0	6,200,000	6,200,000	
沿岸海洋研究会	0	400,000	400,000	
システム利用料	0	1,400,000	1,400,000	経常 40 万 / 年＋初期費用 80 万円＋選挙
会議費	0	310,000	310,000	評議員会、賞委員会他
旅費交通費	0	800,000	800,000	諸会合旅費
通信運搬費	0	564,000	564,000	通常郵便料、ML 維持費
消耗品費	0	170,000	170,000	コピー、封筒他
雑費	0	540,000	540,000	会費および JO 掲載料クレジットカード入金手数料等
2. 事業費	**0**	**17,025,000**	**17,025,000**	
大会開催費	0	0	0	
秋季大会運営費	0	5,880,000		2024 年度秋開催（対面開催予定）内訳は下記
会場使用料	0	1,500,000	1,500,000	
会場設備・設営費	0	1,200,000	1,200,000	
web ページ業務委託費	0	330,000	330,000	
懇親会費	0	1,800,000	1,800,000	
印刷費	0	350,000	350,000	
運営経費	0	100,000	100,000	
人件費	0	400,000	400,000	
クレジット決済等手数料	0	200,000	200,000	
沿岸海洋研究会	0	1,473,000	1,473,000	沿岸海洋研究会予算から計上
海洋環境問題研究会	0	100,000	100,000	
教育問題研究会	0	137,000	137,000	
海洋生物学研究会	0	285,000	285,000	
女子中高生夏の学校経費	0	50,000	50,000	
JO 発行経費	0	1,200,000	1,200,000	6 冊分、冊子体 130 部購入費
J-STAGE 公開経費	0	100,000	100,000	海の研究
JOS ニュースレター発行経費	0	1,500,000	1,500,000	4 回分
広報委員会	0	175,000	175,000	
会誌送料	0	1,100,000	1,100,000	学会誌年 6 回、会員 NL 発送年 4 回
会員名簿発行費	0	120,000	120,000	名簿 web システム運営費
送金手数料費	0	100,000	100,000	
学会賞金	0	800,000	800,000	
メダル製作費	0	15,000	15,000	受賞者名刻印
海外招へい費用	0	500,000	500,000	吉田賞受賞者
若手集会助成金	0	300,000	300,000	
若手研究者海外渡航援助	0	800,000	800,000	20 万円× 4 件
青い海助成事業	0	600,000	600,000	20 万円× 3 件
大会ウェブサイト改修費	0	0	0	
法人化関連・税理士費用	0	300,000	300,000	税理士費用
租税公課	0	70,000		都民税均等割
日本地球惑星科学連合会費	0	10,000	10,000	
地学オリンピック協賛金	0	50,000	50,000	
防災学術連携体年会費	0	30,000	30,000	
男女共同学協会連絡会分担金	0	15,000	15,000	
連絡会シンポジウム経費	0	15,000	15,000	
小　計	**0**	**27,409,000**	**27,409,000**	
3. 予備費	**0**	**31,761,454**	**31,761,454**	
合　計	**0**	**59,170,454**	**59,170,454**	

アカデミア メランコリア（第43回）（若手のコラム）

富山大学 理工学研究科　藤見 唯衣

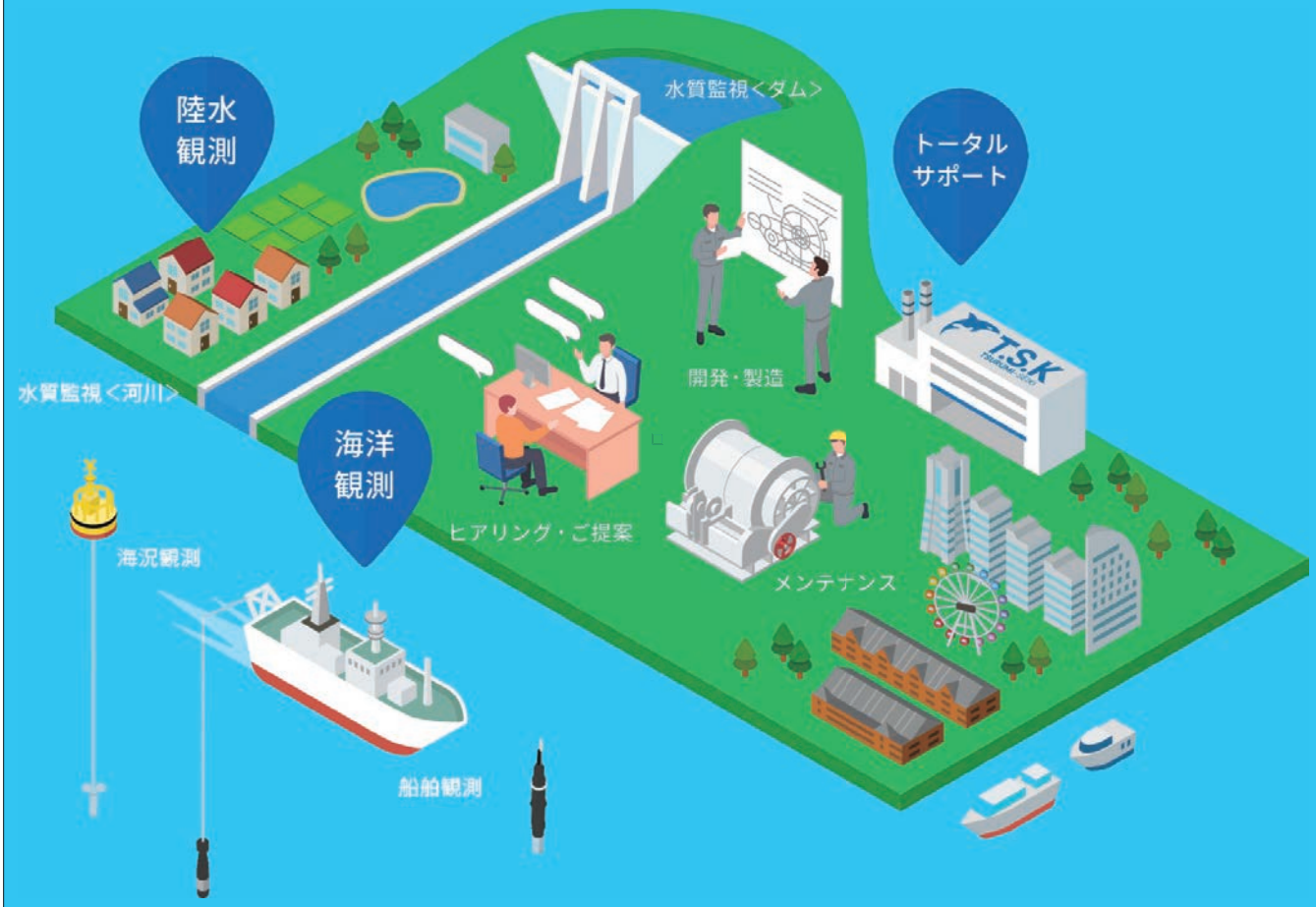
初めまして、富山大学の藤見 唯衣です。同大学の大塚さんからお話をいただき、参加させていただくことになりました。貴重な機会をいただけたことに大変感謝しています。私は現在、富山大学理工学研究科にて堀川 恵司教授のもとで修士２年生として研究に取り組んでおり、博士課程への進学を目指しています。若輩者の拙い文章で恐縮ですが、ぜひお付き合い願います。

現在は有孔虫の個別個体分析の開発・改良を行い、その手法を用いて海洋堆積物中の浮遊性有孔虫殻を用いて過去に発生した黒潮大蛇行の発生頻度の解析に取り組んでいます。元々微化石に興味があり、堀川教授からこのテーマをいただいたとき、「これだ！」と思い研究を始めました。この場で、私がいま取り組んでいる研究に興味を持ったきっかけと、研究の魅力について綴らせていただきます。

私の地元は昔石灰の生産が盛んだった地域で、いたるところに古生代の海洋生物であるフズリナやウミユリ化石を含んだ石ころが落ちていました。元々恐竜や化石が大好きで将来の夢が化石博士だった私は、小中学校の帰り道に寄り道してフズリナの入った石を探し集めていました。恐竜など古生物界の花形（？）生物も大好きだったのですが、子供でも簡単に集められるフズリナはコレクター心を手ごろに満たしてくれる私にとっては特別な古生物でした。高校生になっても化石が大好きだった私は、化石の化学分析を用いて堆積年代や周辺環境を復元する研究を知り、それまで私が化石や古生物の研究でイメージしていた発掘や形態観察などとは異なるアプローチで化石の研究ができることに興味を持ちました。特に、フズリナが底生有孔虫の一種であることから有孔虫について知り、興味を持っていたので、有孔虫などの微化石を用いた研究では顕微鏡レベルの小さな生物から様々な情報を得られることに感動して、自分もそんな研究に携わりたいと思いました。

大学生になり無事に現研究室に配属となってからは、念願かなって浮遊性有孔虫の化学分析を用いた古環境復元を行っています。自分の手で堆積物中から有孔虫を拾い出し、微量金属分析を行い、その結果から堆積当時の表層水温を復元しています。自分の手で、まだ誰も知らない過去の情報を明らかにするのは宝探しのようでとても楽しいです。いま取り組んでいる研究では、通常の有孔虫の化学分析よりも細かい時間解像度で解析を行うことができる分析手法を用いて行っています。そのため、通常の分析では解析することができない数年規模で発生する海洋の水温変動現象を解析することができます。また、研究対象としている黒潮大蛇行は、観測記録のある 1965 年以前の発生頻度についてはわかっていないことがたくさんあります。いま取り組んでいる研究が、黒潮大蛇行について未解明な点を解明する一助になればいいなと思います。まだまだ勉強不足な点はありますが、これからも研究に励んでいきたいと思います。

終わりなき航海のパートナーとして。



海洋・陸水・大気観測における調査活動に
正しい知見と洞察を提供します。

株式会社 鶴見精機

https://tsurumi-seiki.co.jp/
sales@tsk-jp.com

本社・横浜工場サービスセンター
神奈川県横浜市鶴見区鶴見中央二丁目2番20号
TEL:045-521-5252　FAX:045-521-1717

水中測器製造部門（白河）
福島県白河市大信中新城字弥平田17-5
TEL : 0248-46-3131

TSK America, Inc.
P.O. Box 70648 Seattle, WA 98127 USA
Phone : +1-206-257-4899
e-mail : tony@tsk-jp.com

リエゾンオフィス（インド）
Liaison Office (INDIA)
Level-12, Building No.8, Tower-C
DLF Cyber City-II, Gurgeon-122002
Haryana, India
Phone : +91 - 9810173319, 9560264316
e-mail : tski@tsk-jp.com

編集後記

私が JOS ニュースレターの編集を担当してから 4 年目になり、任期中での発行は残すところ、この号を含めて 3 回となりました。2 号(8 月発行)は、1 号(6 月発行)との間隔が詰まっており、例年ですと記事が集まりにくいのですが、あにはからんや今回は多くの記事を寄せていただきました。大変有り難いことに広告の掲載が増えたことも相まって、2 号にしてはボリュームの大きい 24 頁のニュースレターに仕上がりました。

編集委員長に就任して間もない頃は、新しい企画記事や海に関するクロスワードパズルなども掲載したいと意気込んでいましたが、結局のところ、会員の皆さまから寄せていただく記事を並べるのが精一杯で未だ実現していません。ニュースレターは中綴じの冊子体にする都合上、4 の倍数ページである必要があるのですが、寄せられる記事を組み上げていくと、印刷会社の努力もあってか、不思議と良いあんばいに 4 の倍数ページに収まってしまいます。おかげで、予定していた記事を諦めたり、急いで埋め草記事を準備したり、という事態にはこれまでほとんど陥りませんでした。残りの 3 号(11 月発行)と 4 号(3 月発行)では、何か私なりの爪痕を残せるような企画を掲載できればと思っています。

さて、現在、次期ニュースレター編集委員を鋭意募集中です。花輪名誉会員の記事にあるように、JOS ニュースレターは学会から会員に配布される唯一の冊子体の刊行物です。編集に興味をお持ちの会員の方、ニュースレターに新しい風を吹かせたい方、美しい風景や生物の写真でニュースレターを彩りたい方、このページの中段にある連絡先まで、遠慮なくご連絡ください。

「暑いですねぇ〜」が人とすれ違う時の挨拶になっている連日猛暑の、今日この頃。このニュースレターがお手元に届く頃には、暑さが幾分和らいでいますように。

(編集委員長　岩本 洋子)

広告募集

ニュースレターは学会員に配布される唯一の紙媒体情報誌です。
海洋学に関連する機器や書籍の広告を募集しています。
お申し込みは日本海洋学会事務局またはニュースレター編集委員長まで。

〒 739-8521　広島県東広島市鏡山 1-7-1　広島大学大学院統合生命科学研究科
電話／ FAX　082-424-4568 ／メール　y-iwamoto@hiroshima-u.ac.jp

JOS News Letter

JOS ニュースレター
第 14 巻 第 2 号　2024 年 8 月 1 日発行

編集 JOSNL 編集委員会
委員長　岩本 洋子　委員　杉本 周作、張 勁、中田 薫
〒739-8521　広島県東広島市鏡山 1-7-1
広島大学大学院統合生命科学研究科
電話／ FAX　082-424-4568
メール　y-iwamoto@hiroshima-u.ac.jp

デザイン・印刷　株式会社スマッシュ
〒 162-0042 東京都新宿区早稲田町 68
西川徹ビル 1F
http://www.smash-web.jp

発行　一般社団法人 日本海洋学会 The Oceanographic Society of Japan

日本海洋学会事務局
〒 100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル
(株) 毎日学術フォーラム内
電話 03-6267-4550　FAX 03-6267-4555
メール　jos@mynavi.jp

(写真の説明)
表紙とタイトル横の風景写真は、編集委員長が航海中に撮影したものです。会員からの写真を随時募集しています。

ISSN 2758-8645